

# 中学高校時代に 耕すべきこと

～東京農業大学第一高等学校・中部 中西 載慶 校長先生から皆さんへ～

今夏も中学生が手植えした稲がたくましく育っています。

水田風景さえ馴染み薄い都会の子どもたちにとって、農作業の辛苦を身に覚え、食への意識を整える好機です。

しかしながら、東農大一の稲作実習は、一過の農作業イベントに終わらせない。厚木の東京農業大学の農場は、大学の研究者にとっては真剣勝負の実験の場です。

同時に、中学生の好奇心を耕すフィールドなのですね。

日本をはじめ温暖アジアでは傾斜地や寒冷地でも苦心して稲を栽培します。でも、どうしてフランスにもドイツにも水田の風景が見られないのでしょうか？実習水田はカルガモが浮かび、無農薬で稲を育てます。水田に農薬をまいた場合の利点と欠点は？実習中の子どもたちは、水田から顔を出すカエルや、葉で休む昆虫と戯れています。どのような生物が何を求めて集まるのでしょうか？それは害ですか？益ですか？日本人はお米の味覚にこだわります。古米はなぜ味が落ちるのでしょうか？そもそも、どうしてお米は「おいしい」のですか？江戸時代の「米本位制経済」と、21世紀の貨幣経済の差異は？日本各地の秋祭りは何を祝っている？稲ワラは簍や草鞋を編みリサイクルしました。最先端の研究現場では、ワラからアルコールを生産しています。稲ワラは枯れ草なののでしょうか？

子どもたちが眺める風にそよぐ水田の緑。それは、あらゆる世界に誘う入り口なのですね。

私は、中学生たちに関連知識をせっせと調べて蓄積してほしいのではありません。ひとつの事物から発展させる好奇心こそを授けたいのです。「不思議だな？」「なぜだろう？」と首をかしげる瞬間から。まずは、自由に「感じる」マインドを大切に。答えを急がないように。中学時代に、少々テストの得点が不本意でも心配不要。「自分で調べてみよう」「切り拓こう」と意欲さえ耕しつづければ、生涯を通じてあちこちから学びの命が芽吹くはずです。その芽は、大学の研究室で、世界のステージで、加速的に伸びるでしょう。ノーベル賞クラスの科学者が、実は中学高校時代の成績が悪くて…とのエピソードも聞きますね。彼らは青春時代に科学者マインドを磨いていたのです。

中学高校時代に、さまざまな環境・ステージ・素材を育みたい。広い世界と出会ってほしいからです。つまり、私たちの役割は知識を教えるというより、学ぶ方法論の教授です。受験勉強でも技術を教え込む以前に、意欲をかきたてたいのです。

私は、長い間、大学でたくさんの学生たちと過ごしています。知識豊富、英語も堪能で難解な数式をすらすらと記す学生はたのもしい。私は、それだけではなく「気の利く」学生に期待を寄せます。「問題解決能力に長け、発想力が豊富」と表すべきでしょうか。そのような人材は研究現場だけではなく世界が求めていますね。

また、「教授はこう言っている」「論文にはこう書いてある」をうのみにせず、「もしかして誤りでは？自分で確かめてみよう！」と無邪気にチャレンジする学生が研究現場を活気づけています。先人が見いだした法則を知識として取り入れるだけでは、狭い場所にとどまったまま。部門外からの大胆なアイデアも歓迎したい。専門家から「そんなのは無理！」と冷笑されてしまうかもしれませんが、でも、しなやかな発想が、定説や常識を覆し、画期的な成果を創造した例も数多なのです。

大人たちは、レールを整備して、機械の部品を組み込むかのように子どもを育ててしまいます。テストの得点だけで品質をはかってしまいます。それでは与えられ、枠にはめられるだけの成長です。「気の利いた」態度も、大胆な提案も期待できません。中学高校時代は、常に、問題意識を絶やさず、自ら発想する習慣を築き、生き生きと学んでください。幼児は、ピュアな目で世界を見つめています。中学高校段階はまだその延長。ここで意欲や好奇心が地に枯れてしまえば、生涯、蘇生しないでしょう。

昨今の大学生は目的意識が希薄。憂います。その傾向は難関と呼ばれる大学の学生の方が顕著かもしれません。きっと、「合格」を目的に中学高校時代を過ごしてしまったからです。与えられた学習に黙々と励めば、テストでの得点力は向上します。でも、それだけでは、せっかく苦労して志望大学に入学したのに何もできないまま萎れてしまいます。何を学ぶか、いかに社会に貢献するか、主体的な意志を携え大学に進学してほしい。そうすれば、生涯、伸びつづけるのです。

そのために、中学高校時代になすべきことはまっとうしてほしい。大学生の基礎学力の低下が嘆かれています。コミュニケーション能力も欠けています。大学での再教育も課題ですが、むなしく感じます。基礎学力もコミュニケーション能力も20歳前後では手遅れだからです。中学校高校時代に修めておきましょう。大学は高度な学問を究めるステージです。

ほかにも中学高校時代の課題はたくさん。豊かな感性を育ててください。化学の世界であっても感性を求めているからです。分野を限らず学んでください。専門分野を究める人は異種な分野から刺激を受けているからです。英語が話せるだけでは不足。世界の人々と異なる、日本人らしい発想やアイデアで貢献してほしいからです。日本の文化も体得してください。グローバルな世界で活躍するためには母国のアイデンティティは必須です。

もちろん、若い時代に社会規範を涵養します。東農大一に課せられた大切な使命です。

東京農業大学は120年の歴史を歩きました。信念を守りながらフレキシブルに時代に応じたからだと確信しています。各私立学校は、創設者の意志を受け継いでいます。東京農業大学全体として「こういう人材を育てたい」「日本はこうあってほしい」との想いが支えています。

23年春、東農大一は初めての一貫生を送り出しました。続けて中学7期生を迎えました。

東農大一の先生は優秀だと自負しています。信頼して任せています。教育システムを根底から修繕するような改革は不要だと考えています。しかしながら、すべての教育活動について校長として4年間を振り返り、点検はやみません。背伸びはしない。慌てない。着実にマイナーチェンジを積み上げ、少しずつでも東農大一の教育を充実させたい。

今は成果主義が短絡的すぎるのではと案じています。教育は目先を追い求めず数十年先への投資です。進学実績だけに目を向けず、永いスパンで見渡し人材を育てる学校でありたいと思っています。

各地の私立学校は、どこもすばらしい教育に努めています。受験生ご家庭の皆さんも、たくさんの学校のメッセージに耳を傾け、私立学校の想いに納得できるかを確認してください。そして、ふさわしい学校に出会ってください。

もし、東農大一のスピリットに共感していただけるのであれば、東農大一の広々とたフィールドで会うう日を楽しみに待っています。



## ◆中西 載慶 校長先生

東京農業大学教授 農学博士 前副学長（専門分野：生物化学工学・応用微生物学）

トップクラスの研究者として知られる中西先生。温和な表情の中に愛情と情熱も秘め、東農大一を導きます。声高に先導するというより、「見守り支える」タイプの校長先生でしょうか。

東京農業大学の学部長や副学長の経歴から、学生たちを導く指導者としての経験も豊富。学校運営や教育のスペシャリストとして期待を集めます。

●東京農業大学のホームページ内「WEB ジャーナル シリーズ・身近な物質」には中西校長先生のレクチャーが掲載されています。身近な題材を扱った、軽妙なレクチャーです。受験勉強の合間などに、お子さんと一緒に楽しんでみてはいかがでしょうか。  
「WEB ジャーナル シリーズ・身近な物質」 <http://www.nodai.ac.jp/journal/>